

# 七湯めぐり

熱海温泉 スタンプラリー 押印帳

小沢の湯で  
温泉玉子を作ろう!



## 熱海温泉の由来

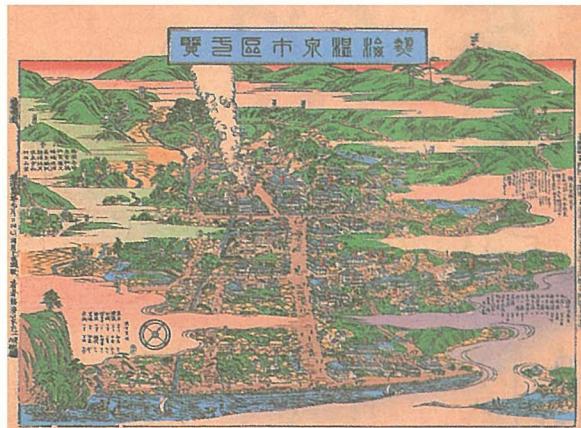
【あつうみが崎】

今をさること一千数百年前の昔、温泉すさまじく此の海上に湧き昇つて、浦浪ごとごと熱湯となつたりければ、このあたりを「あつうみが崎」と呼びぬ。魚介なべて爛れ死し、然らざれば遠く逃れ漁業すたれ、田畠荒れ、住む人安き心もなし。あまつさえ、或る年のはじめ、沖遠くすなどりに出でし若者ら、残りなく暴風（はやて）に吹き流され、船くつがえりて溺れ死にしか、幾日を経るも帰らざりけり。

時に、玉ぐしへ箱根の山に一人の生き仏おわします。日々に方広経一万巻を誦したもうの故に、世人崇めて「万巻上人（まんがんしょうにん）」とぞ呼びける。此の上人、或る日、錫（しゃく）を此の地に飛ばして、里人らに宣（のたまうらく、「われ、國らずも、常陸なる鹿島明神の夢の御告げをおもむりたり。すなわち、汝らを救うために、三七日が間、断食加持し、其の驗（しるし）によつて、海中の熱泉を磯山のあたりに移し、却つて之を一つの温泉と化せしめんと欲す。汝らも誠心をぬきんで、我が願の成就を祈れ。ゆめ、はやまりて絶望すな」とぞ仰せける。かくて磯山の窓にこもりて、三七日が間、食を断つて薬師如来に祈りたもう。

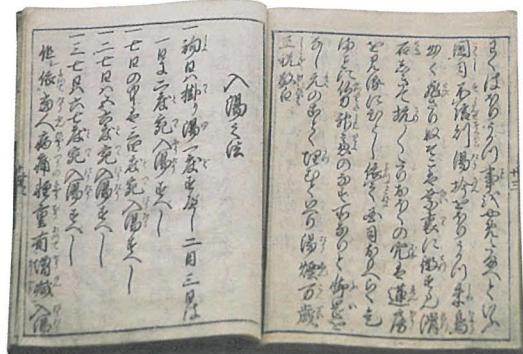
「喜ばつしやい、皆の衆、薬師如來の御加護によって、わしが念力も満願して、海の中の熱泉は、みんなあの山へ移つてしまつたのじや。……よろこばつしやい、よろこばつしやい」

坪内逍遙作「熱海ベーデェント」より



## 温泉「入湯之法」

（豆州熱海之記）



「入湯之法」（『豆州熱海之記』）

元禄八年の『豆州熱海之記』では、熱海をおとずれた経験をもつ医者の勧めとして、初日は一度全身に湯をかけて、体をあたためるだけにとどめ入湯はしないようにして、二日目、三日目は二度ずつ入湯し、四日目から七日目までは三、四度ずつの入湯とすること、二回り目は、毎日五、六度ずつ、三回り目は、毎日六、七度ずつの入湯と定めており、各人の病気の軽重によつては、回数を増減せよともいつてある。また、ぬる湯は腹がはるから、あつ湯の方がよいが、そうかといつて、あまり熱いと疲れが出てくるので、自分の体力をみて加減しなければならない。いっぽう温泉の湯は、飲むと下痢をするため、飲んでいけないが、胃腸の強い人は、必ずしもそうではない。要するに湯治が効いてくれば、のどもかわき、食欲も進んでくるといつてている。元禄のころには後世とちがつて、湯店側はむしろ医者の世間的な地位を利用して、こうした宣伝をしていたと考えてさしつかえない。